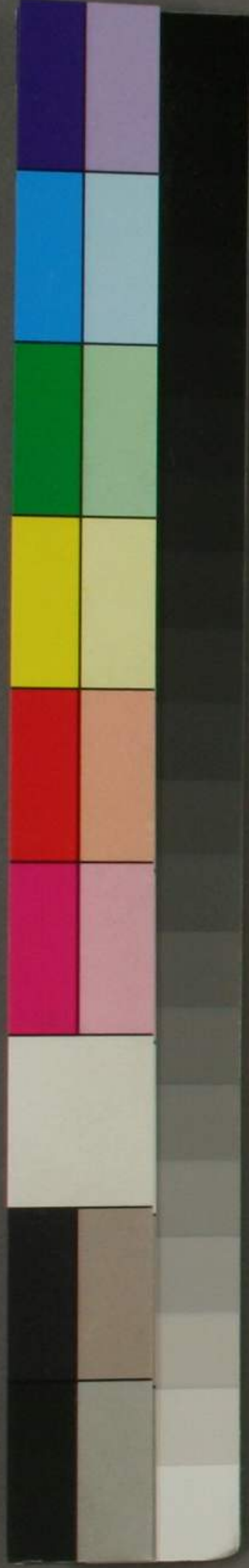


繪本拾遺信長記 八

〜13
3564
8



門へ13
 號 3564
 卷 8



繪本拾遺信長記初篇卷之八

目録

- 氏家入道ト全討死之事
- 長勝の二探信長ヲ帰ると退討死
- 氏家入石討死
- 弓削修理久強勇討死
- 信長焼延曆寺事
- 日圓
- 宇治松崎合戦之事

繪本拾遺信長記初篇

目一

早稲田 大學 圖書館
 昭 34. 6. 3 受
 藏 書



円圖

刀搦坂合戦山崎長門守討死之事

信長之遺骸を妻爲氏

刀搦坂合戦山崎長門守討死

朝倉義景赤雲寺より自害

朝倉義景赤雲寺より自害

朝倉義景赤雲寺より自害

朝倉義景赤雲寺より自害

繪本拾遺信長記初篇卷之八

氏家入道下令討死之事

比叺の門後等本下及右郎が武勇又陣を造るんが一揆のりり
を油度の合戦又坂陣」再び戦ん氣をりり心く又原矢て
増く一揆と稱する客又勢州長崎一向宗の一揆の去勢信長の
舎弟長七郎と討死其勢の強大なりしやが小信長先是と信
代せんとく同年八月十日又万余騎の大軍と率し長崎へ出馬
あつは長崎の地形と巾に方皆大河三をに事じ流人馬の紐
引自中うらざる切あるる小後安き門後の多勢へきりし獲又捕
獲り歎むるは敵」く戦ひ一處に退散さんとてなぐとの引
あけり信長け体を刀々く按とお送し左右と顧みてややう



討 退 信 乃 長
以 兵 入 長 一 乃 長
討 兵 入 長 一 乃 長

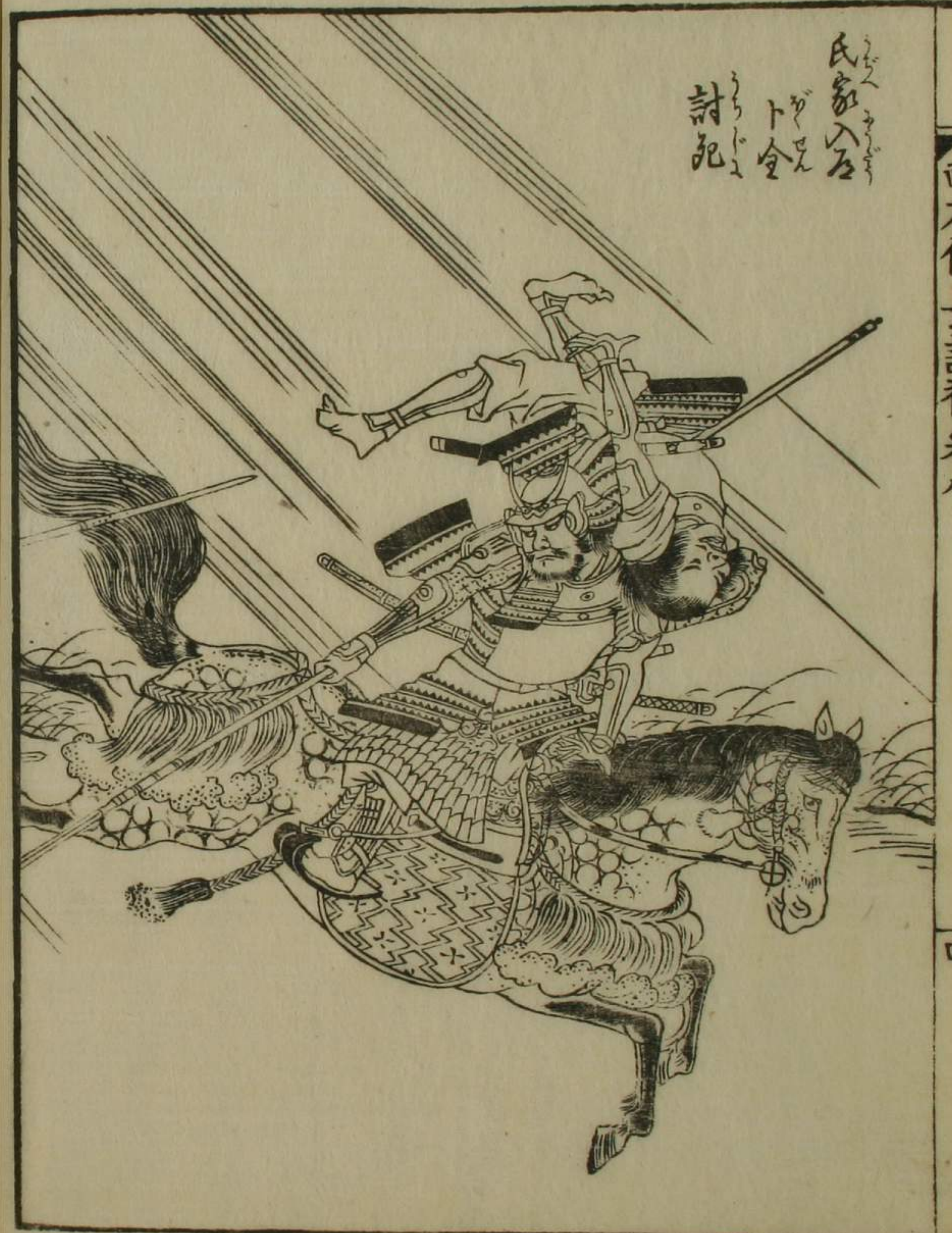


ある後しの一揆も構うるる是等の城と遠く新平へは
 味方の人数を換じど先試しよ一妻せめて強敵を何へ中て
 熱戦ひしくと川と後し圍を作て妻よせう城中待すまけ
 うるのうれが敵の換炮筒先とるべ雨よりあげく敵らうけ
 ひるむ石丸見極しと騎馬の武者二ふ身とらと鳴いて詰り
 毎二毎三は突まれば小田勢留しすなかりえだんがざれして引を
 を斬之突之追討わふ小或の馬は詰例され或の川中へ退るるを
 討う者又百余人城兵のうろくくと軍勢を引上げ城門と圍め
 矢炮と隊号が再び打崩さんと静り以ていれしの高うがさ
 そり久よたる信長元来場教功者の大おるれば城力妻に
 さんとせば味方の兵士と換じらるのうろくは一揆系は妻らうのうろ

今又後指さきえんは構うるど勝候いすまからる肉は一先軍勢
 を引をらひきて征伐しどしと十二日の未明より軍勢の備と
 突り本國としてまゆくと引をる城中より是と刀々くと信
 長の冊と解く退くぞ退うけと討えとやと血丸の若若一子余
 徳をえとて退うろろ小田方小し今日の退はたるゆくと信長
 が陸一の勇臣柴田権六郎勝家後殿しと退きしよ一揆系が追討
 心得たりと小とて岸より鉄炮の村人と並べると一日は打うけ
 とせ炮烟の下より槍爪へ三町半突まると一揆系とてあて
 礼と交る勝家急と勢とまじらわると引にしが何とけしとん
 合戦市の馬車と敵兵の中よえ落し最う勝家が小姓よ水槍
 活右衛門といふ若け時十六夜の少事としが只一人敵の中へえて



氏家入石
ト全
討死



彼馬印と云く徐く之ゆり其勇猛と怒きくや一揆を放
 て是と追ひ勝家希代のふる名と稱養して母衣と袂けく籠
 大舟の舟にぬきわが小長瀬の一揆に小田勢と喰止んと云へ十
 艘乃一舟を押し大田川と一帯に下り勝家の横さまより弓
 鉄炮と絶回りおろくは家と討り兵士殺と知り勝家
 右の左股を打たせり漸二十町斗引たり小舟が舟を守入
 留てえんぐと戦ひ双方討死に候へ守も又源くを履
 降して引り下り氏家岩路入下命令修守と候て後殿して
 退く下り口も怒と書大兩車壯と流して降来る小一揆承いよく
 多勢とぬく用と作つて追来るト命令の者種田信隆守官
 川佃馬守飯沼勘平西尾小六等必死とぬく戦ふと下り勝家

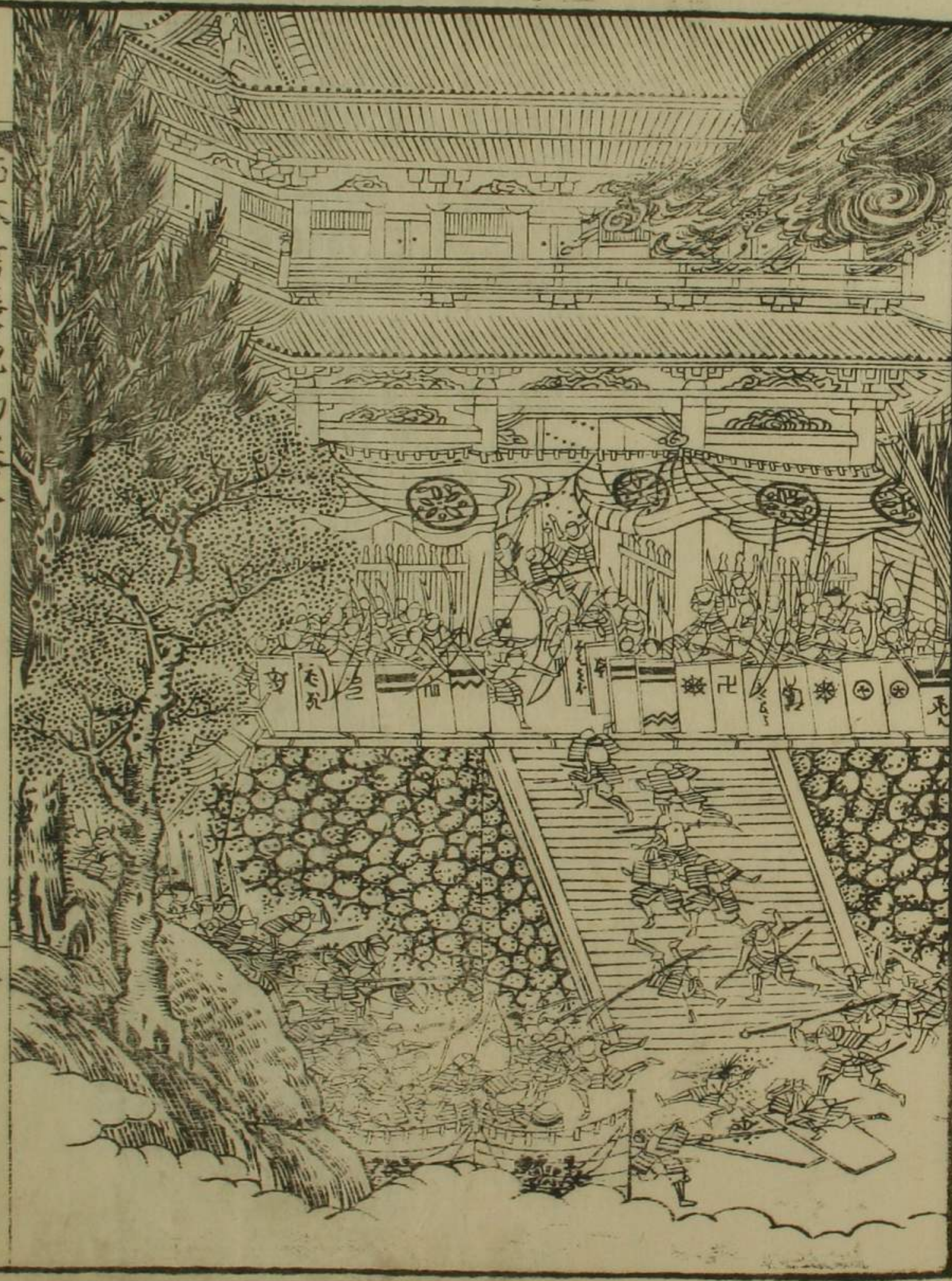
勝一葉内知ぬ地をれ討死に負其殺と云く氏家ト命に
 家臣桑原右近西伍勘去勝等と大田村と引渡しはけはるの一揆
 又押びはしく峰記と八方より切立とバト命令後家又踏歩勇と
 ろろろと戦ふと下り小勢と云殺討の戦ひは源承とト命令と
 是れ後兵士三千余人討死に候は飯沼勘平は死に候り
 て戦ふと下り命令が討死に候り候り来り大勢とまくり立
 一揆の大舟下回三後と下者を討死に引退んくはけはるも
 多勢の一揆より門より門付と下りしを死に殺すとのと負
 く退きくのみく見へるを麻多三郎花房門桑原云仇守
 二百余人と殺しくあ一勘平を殺し約尾村と引たりは討死
 又三文と云き雨の跡まより改志死りさけがの一揆も家より



退きし物別にして退散せりまよト令が近士より削修理
亮といふ者生年十八歳主人の在ぬ討死し給ふんと只一騎
て久せば一揆づくに又百人林の内又雨を凌ぎて休み居り修
理亮大志小抄のまゝ悪き一揆系くる我主人のづく又押し
我の弓削修理亮とく大勇の兵よりその厚忍孤報せんため
只今討死をとるぞ我とらん如系来きやきとれと叫りては
も大勢の其中へ令釈もろく切て入縦横又荒ままり後斬死
をぬりたるは惜むべき若者なりと世の人ぞて縁しる

信長焼延曆寺事

河州小谷の城を凌ぎ倭系守長政といふ小見して信長と云さんと
本願寺門徒を招ひ兵杖と勅せしよ本下後若郎がひひ中と
働き小一揆を散乱し長政が志と遂に却て信長と送眼と争
浜近田信長苗圃働く遊しと覚悟しこれに諸方の要害若殿
を殺多にしらぬ率を築き合戦の利をとりて信長を
受てさうが河州(教向)して凌ぎと討死しとく同年八月十八日又
万余騎と引率し河州佐和山彦又即左馬門長系が居城と本
陣と如く宿り給ふ九月朔日志村の城と多て城を志村筑後守
を退落し六百余級の前と得たりけ軍威又驚りされ小川の城
令本林の城信長と降系以日月十一日撤回(張き)山園玉林毎
か燬又宿陣あり日十三日比叡山延曆寺と焼捨山との衆徒
等一人も残らばお殺せしと知せり耐は多久同右馬門尉信盛
武牛肥後入道又菴号流めてヤラるの抑比叡山とちいん取安山



信長 延曆 寺 燒之凡



蓋學大庭場皇武西門の祈禱地と勅仍不退の靈地なり
是又倭之いふへより弘明の佛威又つもの山との衆徒我之
任以て移ししうにされが上代の帝皇も朕が心又任せぬあり
双六の塞鴨川のあ山法師と宣ひ度くは狼藉と宣先
て穩俊は指墨給ひぬ君今是を乞ひ給へん國家の四章は遠
ひ天下の人皇又宵る也」と言と置して諸あたらしくも信長
酒の匠教方の軍兵に下知を傳へじも又廣き天台山を禱麻
竹葦のどく又丸圃と岡の夢山谷小勅搖しあつとつきて美上
る山門三々の大衆谷く又相支へ防ぎ我ふとつへもあまの
事くもせに切捨く美よりるや奪く又火と押さハ折る
麿凡起吹く山王三十一社をにじめし根中堂種接續苑

院く寺く靈佛名像經卷を教ひとのりも妙くは只二斤の煙と
遊張る傍後多と退治く搜し出とくく肩と劍山門破
滅の有りこま言語る對あまれありし次分は信長は東坂本の大
名あの下又馬と之山一山の燒盡とよて大さ小笑ひ去年朝倉
又一味と我軍と落しめたる眼もあひ知りつんと教表せり
糾り信長の御恩を是とて其餘と知るべし

今治播磨合戦之事

信長は叡山と燒盡し更軍兵とまゝめて彼阜の嶽より
移三年元龜三年は州の渡舟と我ひ着し渡舟は本嶽を押
の乃鹿洲着るに向ひ嶽と海さき本下辰右郎守らし小權
合して是年八月にぬ明奉元龜四年改元ありて大正元年と号



信長が治
 松浦の城と
 表る

日本書紀卷八

南無阿弥陀仏

以は討伐并朝倉為二軍と相結し所を頼む濃州へ討入んと
 して此の横州は平致守門徒多勢州前其の團司と心を合せ此と
 るんと企て其外日國長崎伴野の服部紀州雜賀と一の揆何
 とも難ひをうらひ加え甲州の武田信玄も三州と出張して信長
 を夷んとし濃も其後左右敵りて奴方りてはしその信長軍謀
 又心苦しめ計略の工夫を凝し以に其京都乃新將軍義昭云
 何なるやと云ふに信長と悪く難い小田家退討の御教書を
 國へ下されば州の要石山又城と構へ信長を討ん御計
 策まきりの信長女々々いひさへ軍勢と比しの間じまらぬ
 軍と討てがえんとく柴田を明智の三好小倉じて後石山
 の西濃と夷討しむる小何とく強勇の軍あるれば只二日の間又

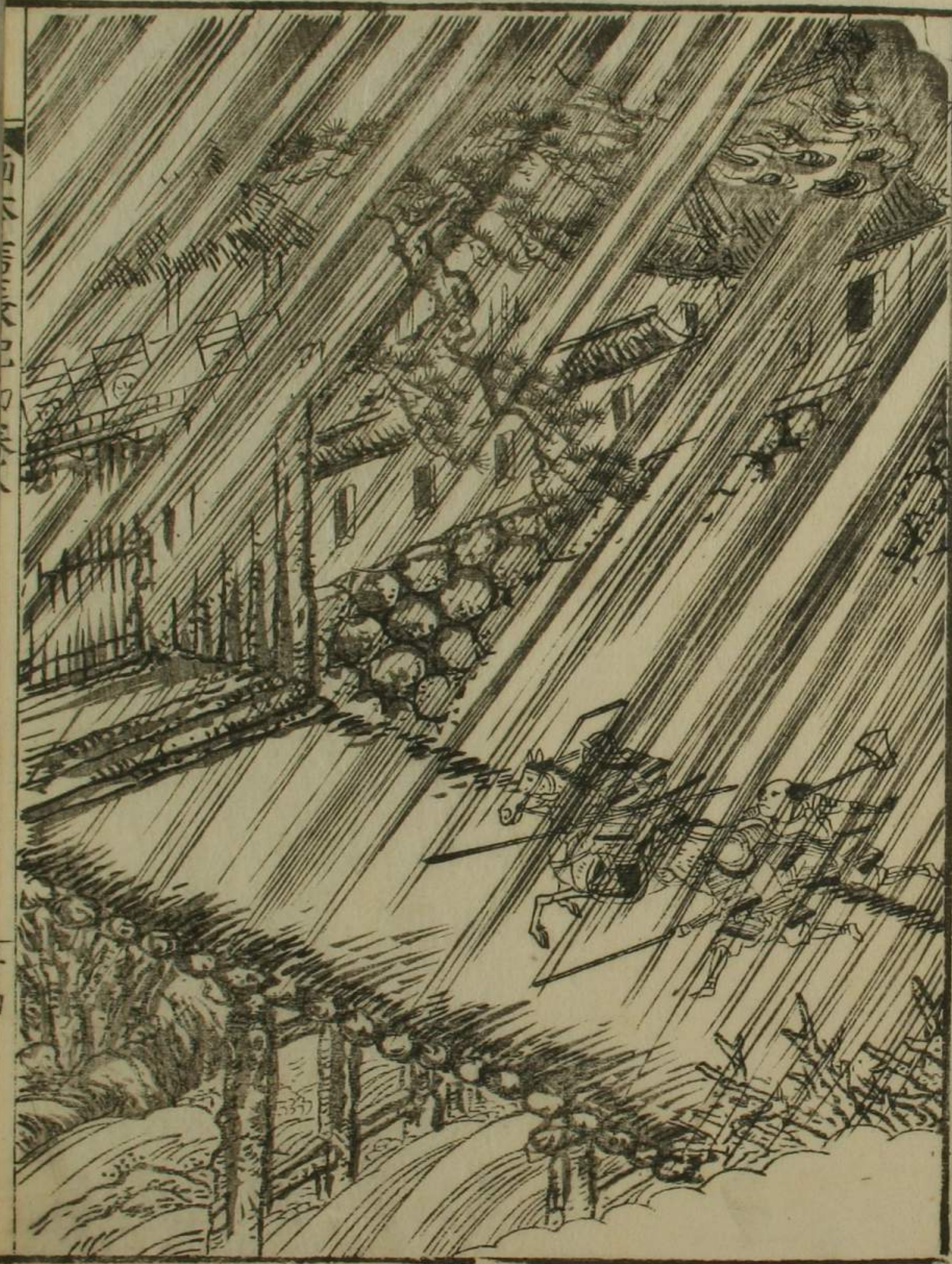
西濃を夷滅し信長へかくと進み以節甲州の武田信玄病死
 して其の信長大き不致ひ忽ち数万の大軍と僧し三月廿五日軍
 を討せんぬ後阜をうて上洛は月廿七日入洛して東山智恵院
 又本陣を居らば諸軍勢は白河栗田に後圍詰み六波羅を御
 竹田辺又元満と軍威濃も出づり難くぞ見ゆとて軍休む
 又發き給ひ俄又都と用き其洛橋の城へうせ給ふ是又依て
 信長軍勢を引く其洛橋河へみケの右柳山又本陣を居し橋
 橋勢城の奴系一人も跡さば打殺せよと下知せしむる小柄に
 其洛川のぬるく濃も諸軍後しうて見合せると信長好く
 以へけ河を一番又後し其洛川の先陣と其名もさ思網も
 網もそのも鬼祢よ何は後其歩る例あり諸軍應じて後

らむ信長が一書又後とつるいと夢を励はし下知あまの夢う
 應じく武者一騎の細のひり一報りて川へさ門と打入て龍川
 孫三郎今日の先陣方りと呼りてと争り込く後にはふ
 編系敵後陣加え安辰辰丸毛市搦我者しと新後を是と
 見くみち辰の傍より此田多久同本下る計多を陣屋明智細
 河ひくくしお階「懸勢合て又万余騎大に搦ひ一時又周と地
 掃よりんで表よりり城兵力と盡」防ぎ戦ふとくもあまの夫
 軍物の殺しもせし中より柴田勝家多久同信盛輝台於陣勇
 をふるふく外構も糸入と見へ」かたや方く又火とつけりる軍
 今又詮方りく命むりくと終りとの沖屋をよと城を出る降参
 し終る信長是と教「もんとや多ると明智先衆の本下参の吉

其のまゝく又諒云中 附河州若の三好義次が方へ送り来りて
 まより壘又同圍後の城を素岩成之祝成と討え芥川の城又向ふ
 てい和同修賀守と教「そ外池田藤後守丹兵庫隆多お軍の
 御方や也」とき悉く討平け横州悉く静りたり荒木村ま
 を搦陣守又也八月に日濃州岐阜へ帰城せらる其勢は激と
 勇くく見へ又たり

刀狩坂合戦山崎長門守討死之事

日月八日に州虎御茶山の城代本下辰辰即乘者か又打と進
 し多の懐丹が附城山本山とせしめし瀧方の城を悉く懐丹又
 教き御方又参りてはけ附を失つた又くは州表へ御出馬ありて
 是よりいとや多し信長守てきくは只今出陣とてとて壘と



信長大嶽
の城を攻むる

信長大嶽の城を攻むる

破阜嶽と立て初鹿所着山は着陣せらるる兵濃尾張の軍兵偽
 我れしくと馳参りわが小督時が向ふ又万余騎をせりけり
 浪舟長政大木小督急ぎ旗着の朝倉は後浩と乞ふ朝倉
 義系自刃三万余騎の軍兵を降しは山の地田津ふは陣と布
 同勢の地飛山余者の庄本が辺は陣をえ其外大嶽焼尾丁押
 旗嶽るんどの要を乞ふ悉く此石を構へ朝倉浪舟の軍士と務
 らせ是將を仰ぐ鉄炮雜合は敵目をこぼしぬかくれど敵味方
 軍威を張て對陣とれと朝倉浪舟の陣中へはつ月とるく
 軍勢は矢小田方へは日毎に多勢とありは後朝倉浪舟が
 け合戦こそ是來はしとさやくわが小焼尾の石と固めたる浪舟
 但馬守忽心がまじしく信長は降参り是と乞ふ旗着勢の英

氣と矢ふあるく小田月十日の夜風雨をげしく雷電駭しく鳴
 てるあき朝倉方より構うる大嶽の砦の矢倉は雷津落る忽
 火燃ところ後小田勢火と敵んと強効は氣なるき信長是と
 入るく自軍勢を引く大嶽は押せ探りしんで攻る後小督時
 がる小大嶽の砦と美濃はれ勢ひは係じて丁押旗嶽と退
 落し其勢ひ弥盛んとて天麻呂も出りかきぞ見へはる朝
 倉義系は引勢を見て大は懼し他國の合戦味方のあり割か
 けしいと旗着引退き要害を守て敵をえんとて十又日の寅
 の朝は田津ふの陣を拂ひ柳ヶ原にして引けと信長通てかく
 めんとみ配りして待たれはと退けて一人は残さば討えよと
 自馬と美濃は近出せば誰か留りみ余と乞ふと吹立を破と

乃祿坂
合戦
山崎長門守
討死



鳴し我芳じと馳りたる去やど小朝倉義系柳瀬又暫く
 体良家良と集りて各角の詮議しりたるが家老山崎長門
 守清ををらくと疏してやたる今度には州へ海へと出馬はたま
 ひたるいと人又出軍運令の發ぬる事と覺はれしとて死せん令ら
 らば先組相傳の本團にて款を引うけたりしく一軍に收切て武
 名を令りせんこそ寔に武名の期ともなはれ小田勢いとや正田口と
 切丸大軍迄より退きりし其の切丸に交へたる後戦ふ討死
 仕べくは其の同急で執事へ引させ給ひ心安く御後めさ
 りにし是ぞ主後の御服をうそいと中捨て馳出たり義系と
 とが別道のうらして退きりてありと一族朝倉掃部女馬
 引よせて義系と抱き寄せたりとて退きたる大羽かひり

どもくれば熱軍一日は猛きま我きたり引えんと右村左村又推
 合宴合おる雨後のゆかりに土滑り踏陰とて倒れて體の
 毛えんまうは武具具足と費して足と換じ馬武具と路を
 捨てて又ゆきまきり見給へば次守は討信長の軍
 運烟とよと退きり先は摩惠多政左衛門佐内義女は
 田令左衛門等逃る款を喰とめくひと切又切捨喰き叫んで
 追討ふ山崎長門守刀袷坂の切死にえりては坂の上よりま
 へより実海に角八面はあがり飛龍廻天虎懐山崩の威と
 ろろひ小田の軍と又六度計退りしけりて討死名と後代
 止めたるそ外家とて戦死する勇士三十八人雜兵の討死を教と
 知べりし小田勢給いせん日本国端と追討たるがけりて踏歩り

返し合せ戦ふ勇士朝倉三郎は表口即河合安藝守院英頼後
守と比治し口十余人悉く討死に信長承く廻て大よそと
難うに城を敷かすの隙まぐ進討り元江州大嶽の陣よりして
敷家の宿より別て十一里の勢程其より小斬捨る死尸連綿と
く絶回く義人との隙を去り討死首級の大概三
八百余級と帳面にはまじりたり

朝倉義系後身長政又ま生害之事

叔も朝倉虎清門督義系は八月十六日居城一系ヶ谷(若陣)
ろろが小田の大軍とや敷家表(別居)並に城を死入るは
罵りく國中の士農工商老若を掛け切きと抱き東西をり
南少たさまよひ回し何てらるる反叛勢之義系是とんとてと矢

ひ続よな城を捨て大郡那美山のやうなる東雲寺と入る方よ
水をくしてせまり居るは一族美山の城主武部吉美系親
忽逆心と配平泉寺の衆徒と語りい東雲寺と五圍に迫つて
義系よ生害ととむ義系大に憐れとて入るも勢ひ既よみ
別ていかにこたへきむ御もろく腹掻切て死しうろろ武部吉
親も義系が首と掲げて信長(海邊)とらへ信長親に解ち
ろろ首と長谷川宗仁と修て京都よのげ三系河あに
て御門よあけらまじり叔も城を一圍とくく平定しけし
若原九郎玄清今度義系と殺き二番又味方と争りたるも
忠節第一とく掛田極摩守と改名(城)城を一圍の守度代
として一系ヶ谷よと(並)少庄の城と修回九郎治郎本下助元



勝門明智十左衛門三人を止めて政目を回し四月廿六日信長
 軍勢と引て再び比州に立寄り虎御前山の城に着城し其
 翌廿七日本下坂吉原寺に命じて系掛陣を築く其
 人衆を押し上げ小谷表の浅井久政と其子長政が居るを
 切信長自大军とひて久政長政と旗桶のどくを囲三日一夜
 自軍をも絶せし美濃より下野守久政今の我運命も盡く
 とく家臣と集り美濃の酒宴とにじめるは朽く久政が自
 情と受けざる鶴松を交とる徳師あり久政の盡く中交双眼
 涙と涙も今日の盡くそつりくすりも希く頂戴仕るとして引
 交く三盡吾を解と開き埋本の花咲きりりりしよ身のある
 果ぞ表と之とるると鶴松はしりりり一應真と信く志すく

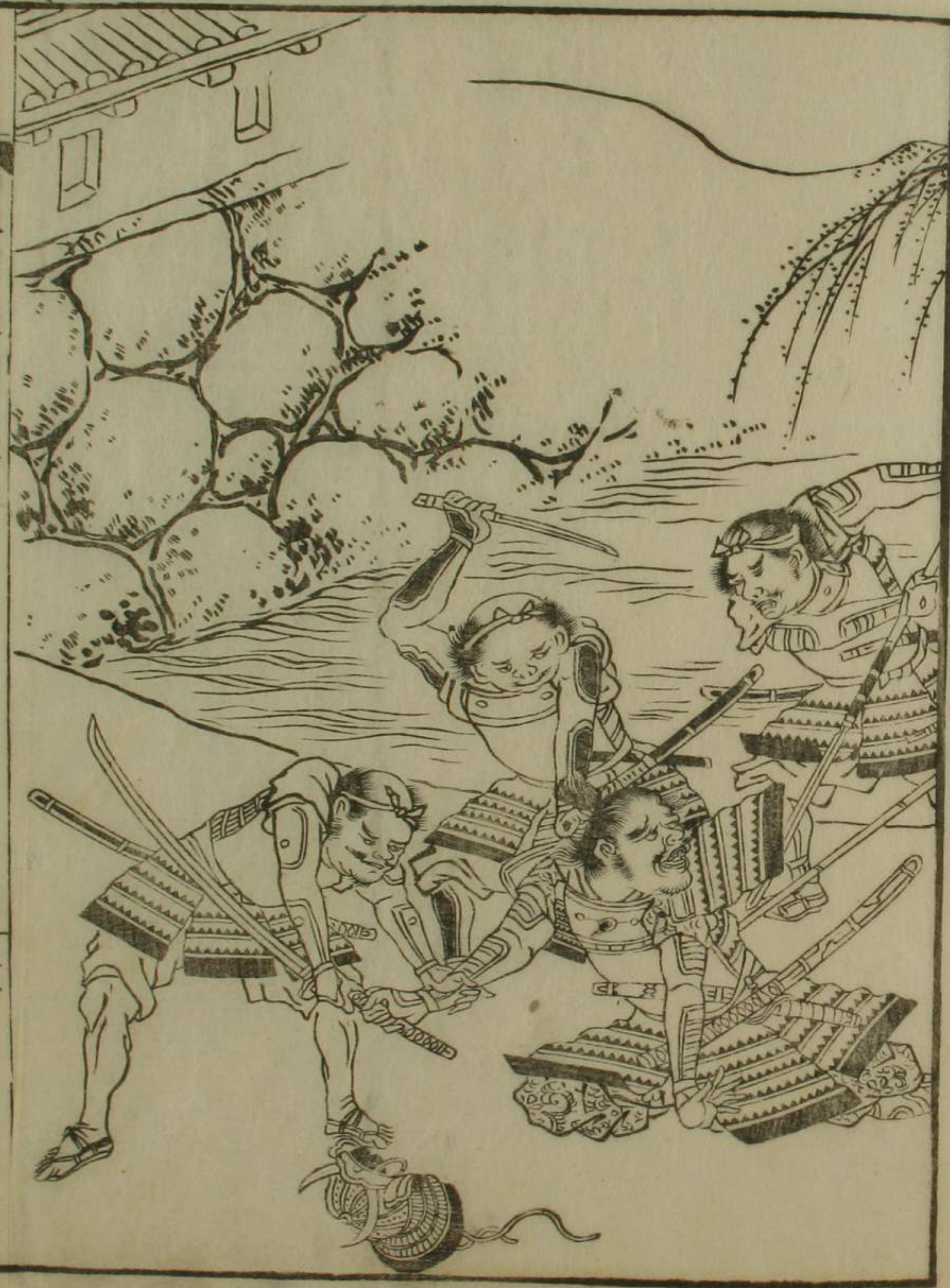
盡くめぐりしるる叔父さけひの夢鉄炮の音次第よ冷はしく今の
 かのよと見へるわどよ久政死てより肌服脱ぎ文字よ切くう成
 鶴松を交ひひくくも女階しを身も共よ腹押切刀の切先と咽
 よ推當うらぶしよ却て死より多け付後守長政も美期と究
 妻女よ三人の女ると帰る信長の陣へ送りさるる是の長政の妻女
 と信長の妹のれがかりにじり英雄の信長も縁者の因ををひ
 てや不破河内守と俊として長政へ送りさるる武門の智い兼
 合戦をいよ今日の仕事は是れ及びさるる信長が心を
 押ひていさう跡意の体なせは長政退城しるふおひてい助
 命の儀お遠あさうはと美濃にすべは長政は附久政が生
 害しと知りはさるるあはれはふして笑く一帯に後切をなと

ぶれどまに石破がとら小吹い百人余の士率と後(小谷の城と
 出るるをた一昨日中押守久政既又切腹あつるは)若る者あり
 くれに長政大さ小勢さ叔い出ぬまごう歌のまに後され後で
 らまごう末代との悪名とく(石原赤尾)他守が殺り入
 て後又切腹して死うるまごうあひくは州一國忽は信長が飲不
 とあり小谷の城を本下辰吉郎秀吉小堀り且十二万石の石原
 を宛きいさる其外は州の仕長とも悉く下知せり是九月六日
 軍勢とまごう濃州岐阜へ帰城ありける

城を強劫横州本願寺勢城用云云事

け年の冬城を圍ふ又く本願寺門後の一揆降託して國中強劫
 其其後ろいまごうと死る小朝倉家滅之の後桂田攝磨守一系ヶ谷

又在城して國政と執り入る私欲のうるまひのまごうくれに百姓亦
 恨も憐れ元より加城の兩國先多より親密宗の門後殺しく
 教多の郡村本願寺の飲不と門後の軍と又城をのうるまひ
 うまごうあひけけ附本願寺宗の門後等相談しつるに桂田攝磨
 りと朝倉家善代の長下としく忽信長よ心と通じし人義系
 とこせし系言語道断のうるまひかり朝倉の我本守攝州本
 願寺新門後の男おれが秀必て我くが懇款信長より先(は桂
 田と討殺せと教方の門後一揆をぬ)一系ヶ谷へ押よせ是夜三日が
 同息をり後(は)秀吉よりつる小桂田力盡き城中の柳の馬場にて
 一揆のぬる斬殺さる小庄又在城せし小田家の武士押田九郎治郎
 本下助左衛門明智十左衛門打をぬてけ信長へ(進)つる小



本願寺一揆
掛田攝磨守
を殺す

信長垂てより國中一揆の輩らんを察し、徳と朝倉の降る掛
 回を以て守護代(山)置るる一揆のものと借て殺させん謀るる
 たる又も驚く乳きとらへ、河田本中明智等小勢を以て一揆を
 合戦悪うりて、早く兵士を引出し、岐阜表へ引をせしと下知の
 クルバ三浦信俊、即日兵を引て濃州(海國)よりクルバ信長
 又は一軍と以て本教寺と討の名と、近く横州表發向の(内)に
 下知を他人らよりするを、信長が河内より親率、小信仰の
 軍多うりクルバ密に横州石山乃河堂へは、説と告りたる小
 越てよりかくみんと、光緒(ころ)石山の人多く、其用をせよ
 やとく、先河分口の若くは下河利部教庵二万余人を、これと
 圓り樓岸の城は、番西城後守二万余人本陣は、下河利部進

仲之志摩、互に郎岩倉兵部を、二万余人難波は、一宮徳意守
 河田は、本陣武部を、二万余人と、教庵は、石山の岩石山
 本教寺と守護、互に急と殺せしとの、法構方より本教寺の
 大い、鈴木本寺、自ら先と守り、附川、勇士、教庵、河田、
 馬、女、等、互右の、其、山、大石、大本と、伐、と、討、の、隊、を、互、大
 筒、小、筒、鉄、炮、數、を、挺、挾、向、の、り、け、り、べ、弓、を、強、け、其、の、根、を、
 廢、き、防、禦、の、備、を、人、敵、を、互、い、り、り、大、敵、表、ある、も、勅、り、
 ぶ、り、も、互、に、さ、り、り、

繪本拾遺信長記袖篇卷之八終

